『ちくま評論選』解説

18　象徴の政治学――「御威光」

渡辺　浩

■凡例

1　①②…は形式段落番号。◆は、設問。　2　▽は、本文の追跡・分析

3　▼は、読解に関する技法。　4　☆は、記述に関する技法。

字数目安　読解問題1　九〇字　読解問題2　一〇〇字　読解問題3　一二〇字

■追跡　――引用の処理

①　嘉永六年（一八五三）冬、「微賤」の出ながら前年遂に**勘定奉行**にまで成り上った川路聖謨は、ロシア使節応待のため、長崎へ向け、江戸を出立した。大勢の供を従えた行列が中山道本庄宿にさしかかると、関東取締出役が案内に出た。関東取締出役（通称八州廻り）は、公儀直轄領（「御料」）代官所の手附・手代の中から選ばれ、御料私領を問わず広く関東を巡回して犯罪取締にあたった役人である。川路は旅日記に、やや得意気に、こう記している。

八州廻り、追々出でて案内いたす。百姓共、百姓らがいかなる貴人かとおもう八州廻り、土下座して奴僕の如くなるに、大いに驚くけしきも。御勘定奉行の旅行は、**御威光**、遠国奉行などとは夥しき相違也。（『長崎日記・下田日記』）

▽「勘定奉行」の威光はすごかった。常々百姓たちがすごいと思っている「八州廻り」が、その「勘定奉行」には土下座するのだから、「へー、勘定奉行ってのはどれほど偉いのかねえ」と百姓らは驚いてることだろう――というお話。

②　「御公儀」の高官、全御料を支配する「御勘定奉行」の威信は高い。川路の行列が姫路城下に至ると、「見物の老若夥し。〔姫路藩の〕家老・番頭・奏者番というもの、路上に平伏せり」という。八州廻りが土下座するのも当然である。しかし、本庄の百姓たちにしてみれば、八州廻りは、日頃「いかなる貴人かとおもう」畏服の対象である。その対象が自ら「奴僕の如く」路傍に平伏するのを目の当りにする時、「御勘定奉行」の威信はいよいよ高く、自分たち百姓の位置はいよいよ低かったことであろう。

▽「勘定奉行」への土下座を見る場面は、百姓たちが、自分たちの身分の位置、上下の層のありさまを実感する場面であった。

③　しかしその勘定奉行も、実は禄高五〇〇石の一旗本でしかなかった。身分からいえばその上に多数の旗本がおり、一万石から一〇〇万石に至る諸大名がいた。さらに、別格の御三家・御三卿がいた。上位の役人として若年寄・寺社奉行等がおり、さらに最高の行政官たる老中（そして大老）がいた。彼等は、それぞれの身分格式役柄に応じて上位者に平伏し、時に土下座もした。そして彼等全ての形作る平伏とそれを受ける者の長い長い系列の頂点に、将軍がいた。◆**問1**そのことに思いを馳せたならば、百姓達にとって将軍は、まことに気の遠くなるほどに遥かなる高みに在ったことであろう。

▽「百姓達にとって将軍は、まことに気の遠くなるほどに遥かなる高みに在った」。ここがおそらく、この論の出発点であろう。現代人には実感しにくい、上下遙かな身分の隔たりの感覚。ちょっと想像してみよう。土下座、という身体的な動作によってが、その身分意識が表現されていたことも、現代人には遠い感覚だよね。

◆問1「そのこと」とは？

身分差の感覚、という焦点を確認する問い。直前を刈り取って整頓。

（解答例）「平伏する者とそれを受ける者の長い身分の系列の頂点に将軍がいること。」

④　しかも、天下最大の都市、江戸の中心、深い堀と高い石垣に囲まれ、多数の番士の詰める六十六の厳めしい門に守られた巨大な城に、将軍は居た。その城を、数知れぬ大名旗本の屋敷が――それぞれの格に応じた門構え、広さ、大きさをもって――囲繞（いにょう）していた。この大都市の面積の約七割が武家地だった。将軍は時に満三歳の幼児であり（家継）、時に言語障害に悩む病弱の中年男（家重）だったが、確かに、「立派な宮殿のなかにいて四万の親衛兵にとりかこまれているトルコ皇帝を、ただの人間と見なすためには、◆**【読解問題1】**よほど澄みきった理性をもつ必要」（パスカル『パンセ』）があったことであろう。

▽「将軍」も一つの例。トルコ皇帝やらロシア皇帝やら、下級階層にとって、身分制の頂点に在る者は、遠く見えず、果てしない「土下座」の連鎖の彼方にいる。身体的にそう感じざるを得ない存在について、「同じ人間」「ただの人間」と思うためには、「理性」という武器しかない。現実的には、そんなふうに考えられた者はほとんどいなかっただろう。

⑤　戦国の最終結着として、ほとんど剥き出しの暴力によって成立した徳川の支配に、元来、理論的正統性は薄い。一般に強者即ち勝者が支配するのが当然と考えられていれば、それを真剣に追求する理由も実はなかった。そしてその支配が安定して持続している限り、敢えて自らその根拠を問い詰め、公定するのは、むしろ「危険」ですらあろう。例えば、徳川時代の「体制教学」は儒教だったとされることがある。ある意味で正しいであろう。しかし、その対象領域は「天下」と表現されたにもかかわらず、将軍の統治が、「天命」の委託と公称されていたわけではない。現に中国皇帝と違い、将軍は祭天の儀式など行なわない。また、百姓町人が武士に服従したのは、武士達は皆「徳」を有する、そして有徳者になびき従うのは当然である、と信じたからでもあるまい。「教養カリスマ」を保証する科挙制度もない当時、二本差しの侍たちの軍事政治組織を、そのまま有徳なる文明の担い手たちの集合とはみなしにくい。藩校を有していた藩でさえ、天明末年（一七八八）でも、なお三分の一以下だった。また、禁裏は確かに権威付けの装置の一つだった。しかし、公方様の命令は即ち禁裏様の命令と心得よという論法が、普通用いられた形迹もない。禁裏と公儀の関係を説明するた

めに学者の案出した禁裏による大政委任という説明は、江戸末期に向けて次第に広がりはしたが、通常、禁裏を持ち出すことによって忠誠・服従が調達されていたわけではない。当時の「体制イデオロギー」が何であったか、いつまでも議論の絶えない一因はそもそもこのような事情にあろう。

▽江戸幕府の権力の正当性（「体制イデオロギー」）は何か。「徳」ではない。「教養」でもない。「帝」が委任したという理屈も怪しい。なのに、なぜ、人びとは従ったのか？

「イデオロギー」は、『現キー』参照。〈これが正しいという信念の体系〉、という感じだ。「体制イデオロギー」とは、体制＝権力の正当性を基礎づけるものの考え方、ということだ。帝は天から下りたまいし神の子孫であるから、神聖にして侵すべからざる存在なのだ、とか。大統領および議会は、全国民による正当な選挙によって選ばれた者であるから、国民はその決定に従わねばならない、とか。

⑦　しかし、体制全体の論理的弁証はいかに曖昧、薄弱であろうと、現に身分格式の序列は、あらゆる場面でまことに目に明らかな「事実」として演出されていた。大名は常に大名らしく、武士は武士らしく、そして百姓は百姓らしく在ったし、在らねばならなかった。将軍、勘定奉行、八州廻り、百姓の序列を誤認する余地はなかった。

◆**問２**王様は決して衆目の前に裸では現れず、大城に住まう将軍の下、全秩序は一見自明な安定性を有した。その時、人と人との間の身分の差を異常、不自然と感じるのは、かえって難しかったであろう。その時多くの人々は、将軍は将軍だから、大名は大名だから、天下・各国を支配し、武士は武士だから民の上に在り、そして百姓は百姓だから年貢を納める、と当然視したのであろう。それはトートロジーである。しかし、それに気付き、◆**【読解問題２】**トートロジーと見破るのは容易ではなかった。それは、一つには、身分格式を印象付ける象徴的事物と儀礼・儀式・祭典等の種々の象徴的行為が、永い「泰平」の内に異常なまでに発達し、上位者を見えざる光背で包んでいたからである。都市・建築物・家具・従者・荷物・衣裳等の全てが舞台装置・大道具・小道具となって威信の系列を表象し、それを自他に公示し、相互に確認する儀式が至る所で念入りに執行されていたからである。理屈より心に、知性より諸感覚と感性に訴える諸象徴が、不断に機能し、体制維持の一助となっていたのである。

▽正当性の理屈は怪しいが、感覚的に、とにかく、彼は上／彼は下、という序列が理屈抜きに徹底されていた。丸山真男の「であることとすること」に福沢諭吉が明治の初めに書いた文が引用されている。

「いま大名、公卿、さむらひなどとて、馬に乗りたり、大小を挿したり形は立派に見えても、そのはらのなかはあき樽のやうにがら空きにて……ぽかりぽかりと日を送るものはたいさう世間におほし。なんとこんな人を見て貴き人だの身分の重き人だのといふはずはあるまじ。ただこの人たちは先祖代々から持ち伝へたお金やお米があるゆゑ、あのやうに立派にしてゐるばかりにて、その正味は……賤しき人なり。」

これは、上位者だと感じさせていた光背（オーラ）がはがれ落ちた、維新以後の感覚である。

そのときやっと「将軍も、おいらたちも、同じ人間よ」と思えるようになったのである。

「トートロジー」とは、同語反復。武士は武士だ、は、それ以上何もいっていない。「武士は武士だから偉いんだ」という者に対して、それ以上、理由を問うても意味がない。「どうしてぼくはダメで、お父さんはいいの？」「ん？　お父さんは、お父さんだからだ」なんていうのも、同じトートロジー。

◆**問２「王様は決して衆目の前に裸では現れず」とは、どのようなことか？**

「王様は、王様らしい姿でみんなの前に現れなければならない。」そんな答えでも可。

本文を使うなら、直前を使って、補充整理する。

・「身分格式の序列は、あらゆる場面でまことに目に明らかな「事実」として演出されている」ということ。

・「身分格式の序列は、あらゆる場面で、大名は大名らしく、武士は武士らしく、百姓は百姓らしく、という目に明らかな「事実」として演出されている」ということ。

このあたりまで整理して、消化して、書く。

（解答例）「身分格式の序列は、あらゆる場面で、その身分らしい姿やふるまいとして、誰の目にも明らかな事実として演出されているということ。」

⑧　儒者堀景山は、こう指摘している。

……武家はその**武力を以て**天下を取り得たるものなれば、ひたすら武威を張り輝やかし下臣をおどし、推しつけへしつけ帰服させて、国家を治むるにも只もの上の**威光と格式**との両つを恃みとして政をしたるものなれば……　（『不尽言』）

⑨　本来**暴力の支配**であるため、以後も**威光と格式**を統治の拠としているというのである。明治になって、安政四年生れの植木枝盛もこう述べている。

夫れ幕府の如き者は其の依拠する所元来天下の正理にあらず実は甚だ大なる無理仕掛を以て存在するものなれば……一は**兵力を以て**人民を脅迫し一は**詐術を以て**人民を欺罔し……百方至らざることなし而して其の殊に主とする所は最も力を極めて出来る丈け政府を荘厳にし人民をして之を仰げば弥々高しと思はしめ之を望めば実に逮ぶべくもあらずと感ぜしめ政府と云ふものは仲々忝らいものだ高大無辺なものだと一図に感歎し胆冷へ魂落ちしめんとするに在りて……之を称して**神秘政略**とは謂ふなり。（「老人論」）

▽トートロジーを超えて、「武士は武士だから偉い」の理由の根を掘ると、その答えは、「暴力をもっているから」になる。持続的に背後に「暴力」を感じ取らせる方法として、武士らしい格式の演出が執り行われる。武士は二四時間、武士。しゃべり方、歩き方、そのふるまいのすべてが武士らしくあらねばならない。逆に百姓は百姓らしくあらねばならない。百姓は、その演出に、脅迫され、だまされた。…と、そう気づくのもまた、維新の後であった。

⑩　威光と格式の「神秘政略」は至る所で巧まれた。一藩の武士たちの間でもそうで

ある。例えば江戸時代末期の豊前中津藩では、一五〇〇名の藩士は一〇〇余りの格に分かれ、中でも四分の一を占める上士と残りの下士の区分は顕著だった。◆**問３**その差異は目に見え、耳に聞こえ、筋肉感覚で体験された。上士の家は玄関・敷台を構えていたが、下士の家にはなかった。上士は騎馬したが、下士は常に徒歩だった。長幼と無関係に、上士の家の者は下士に「貴様」「来やれ」と言い、下士は上士に「あなた」「御いでなさい」と言った。そして最下の下士、足軽は、上士に雨中往来で行き逢えば、下駄を脱いで路傍に平伏した。何故かと問う者はなかった。上士と下士の境は「殆ど人為のものとは思はれず、天然の定則の如くにして之を怪しむ者あることなし。」という（以上、福沢諭吉『旧藩情』）。

▽玄関があるかないか、馬か徒歩か、「貴様」か「あなた」か。このような、目に見える差別は、生まれたときから繰り返されることによって、理屈抜きに人々の身体に浸透する。その結果、差別は見えないものとなる。だれもそこに差別があるとは気づかないのである。（女は女らしい格好としゃべり方、男は男らしい格好としゃべり方、というのを、生まれたときから繰り返していれば、それが当然という感覚が定着する。身体性が差別を当然のもの（見えないもの）とするしくみは、このようなものだ）

◆**問３「その差異は目に見え、耳に聞こえ、筋肉感覚で体験された」と、感覚性を強調しているのはなぜ？**

☆端的に答えるなら、身分の差異は感覚性に訴えるほうがよく伝わるから、というところか。ここに⑦段落の「**理屈より心に、知性より諸感覚と感性に訴える諸象徴が、不断に機能し、体制維持の一助となっていた**」という部分を付け加えれば、より明確になるだろう。この部分をそっくり使ってもいい。**理屈より、感覚が効くから**。これが答案の核。

（解答例）**「知性より感覚に訴えるほうが、身分の差異をよりうまく人々に納得させることができたから。」**

⑪　村の中でも同様である。例えば大垣藩領では、頭百姓は家に庇・濡縁・破風板・釣天井を作れたが、下百姓は出来なかった。座敷口を三尺以上にも出来なかった。下百姓が頭分の宅内に履物を履き入れることも許されなかった。村内で裃を着用し、何衛門・何兵衛・何太郎・何太夫等と名乗れるのは頭百姓だけだった。生活様式の些細な一面までが当人の身分を表示し、お互いの態度と心理を縛っていたのである。

▽お百姓の身分の中にも差異がもうけられていたという例。

⑫　そして、徳川の世の末に将軍の名代として上野東照宮に参った経験を、ある元大名はこう回顧している。それは将軍であることの不思議な感覚を垣間見させてくれる。

只今の時世と違ひ仰山なことでしたが、また威厳のすさましき者でした、黒門口から粛然して左右にお徒士目附が平伏して居ます、私は道の真中を進みゆくですが全く上様に対する礼を受けるのですから、覚えず身が戦慄する程で難有きことで御座ゐます、……雨天ですか、私だけは別ですが他は皆頭から濡れるのです。（立花種恭談。戸川安宅編『旧幕府』）

▽平伏される側の感覚。想像してみよう。

⑬　現代においても、最高権力者はしばしば特別な邸に住み、多数の秘書官・ＳＰ等に取り囲まれる。米国大統領ともなれば、公式の席に登場の際には往々Hail to the Chiefの曲が演奏され、演壇には鷲を象った紋章が輝き、核戦争指揮用の黒いアタッシュケースを携えた武官さえ影のようにつきまとう。それはまことに特別な気分のものであろう。事実、ジョンソン大統領が辞任した時、夫人はあのシンデレラのように、「突然、すべての馬車がカボチャに戻ってしま」ったと感じたという。しかし、徳川将軍にとって、そして当時の少なからぬ人々にとって、このような◆**問４**魔法の解けることは生涯なかった。◆**【読解問題３】**彼等の生は、誕生以来死の床に至るまで、そうした魔法の中で営まれたのである。

▽Hail to the Chiefは、たぶん耳にしたことがあるはずだ。「大統領万歳」。大統領が出席する公式行事で演奏される曲。

◆**問４**「魔法」とは？

比喩の意味することを明らかにする問い。▼**比喩は、比喩であることを意識して読み解く**こと。「魔法」とは、現実ではありえないことが現実になること。このように、**比喩を敷衍**（ふえん）（やさしく言い替えたり詳しく述べたりして説明）して考える。

「このような魔法」は、ここでは、米国大統領の例を指している。米国には、封建時代のような身分差はない。だから、大統領だって「ただの人」から大統領になり、やめれば「ただの人」に戻る。魔法と感じられるのは、ただの人という現実から、一気に大統領（夫人）という権力者に転じるからだ。その上昇の落差の感覚を「魔法」の比喩は示している。（将軍には、もちろん、その落差はない。初めから終わりまで将軍だから）

（解答例）**「普通の人間であった自分（人）が、特別な人間として人々から仰ぎ見られ、別格の住居や華々しい儀式の中で過ごすようになること。」**

「これまでありえないことが現実になる」という骨子が含まれていれば、表現はバリエーションに富んでいていい。

■**読解問題**

1「よほど澄みきった理性をもつ必要」（パスカル『パンセ』）があったが、それはなぜか。

☆**傍線部を延長**した上で、「立派な宮殿のなかにいて四万の親衛兵にとりかこまれているトルコ皇帝を、ただの人間と見なすためには、よほど澄みきった理性をもつ必要」があった」について、それは**☆どのようなことかと問いを変換**して考える。

つまり、このパスカルの言葉は、何を言うために引用されているのか？　前後の主

旨を確認しよう。

実際は「将軍は時に満三歳の幼児であり、時に言語障害に悩む病弱の中年男だった」が、「深い堀と高い石垣に囲まれ、多数の番士の詰める六十六の厳めしい門に守られた巨大な城」に住んでいるから、人々にはその実態は**「見えなかった」**。これが主旨だ。将軍には特別な能力があるわけでもなく、自分たちと同じような普通の人間だということは**「わからなかった」**のである。**「澄みきった理性」**とは、見えなくても、同じ人間であるはずだ、と洞察（どうさつ）できるほどの力のことをいっている。この問いの主旨は、**「澄みきった理性」**は普通の人々には持てなかったが、では、なぜ持てなかったのか、と変換することができる。

解答の押さえは、明らかで、**「最高権力者の姿は見えないから」**だ。ここを核として、どのように「見えなくさせられているか」を補えばよい。ただ、この文章は例が豊富というか、多すぎて、解答用にどこを利用したらいいかわかりにくい。このタイプは、「（自分で）例を補う」の逆で、「（自分で）例から抽象化する」作業が必要になる。

④段落初めに「しかも」とあるのに注目して、③と④から理由を一つずつ抽出するのが妥当だろう。

③「気の遠くなるほど長い身分の系列の頂点に最高権力者はいると思っていた」

④「たくさんの人間や屋敷、堀、石垣、巨大な城や宮殿に取り囲まれた向こうに最高権力者はいた」

③は身分という社会的距離感のイメージ、④は地理的物理的な距離感のイメージだ。

【解答例】「最高権力者は、気の遠くなるほど長い身分の系列の頂点にあり、また、たくさんの人間や屋敷、堀、石垣、巨大な城や宮殿に取り囲まれた向こう側の世界にいたので、その実際の姿は見えなかったから。」

たんに「見えない」でとどめず、「見えないように**演出（計算）されていた**」と表現しても可。

2 「トートロジーと見破るのは容易ではなかった」とはどのようなことか。

問いが「なぜか」なら、答えは直後。しかし、ここでは「どのようなことか」が問い。間違わないように。

☆傍線部延長＋指示内容補填。傍線部とその前に含まれる指示内容を補って一つにまとめてみると、

「将軍は将軍だから、大名は大名だから、天下を支配し、武士は武士だから民の上に立ち、百姓は百姓だから年貢を納めるのだ、と、人々は当然視した。しかし、それはトートロジーだと見破るのは、人々にとって容易ではなかった」

という文案ができる。

「トートロジーだと見破るのは」をいいかえたい。

「人と人との間の身分の差を異常、不自然と感じるのは、かえって難しかった」という部分が言い換えに使えそうだ。

「将軍は将軍だから、大名は大名だから、天下を支配し、武士は武士だから民の上に立ち、百姓は百姓だから年貢を納めるのだ、と、人々は当然視した。しかし、それにはじつは根拠はなく、人と人との間の身分の差を異常、不自然と感じるのは、人々にとって難しかった」

これに「現に身分格式の序列は、あらゆる場面でまことに目に明らかな「事実」として演出されていた」からそうなった、という理由をくっつけることもできる。

【解答例】「身分の序列は、あらゆる場面で明らかな事実として演出されていたので、武士は武士だから民の上に立つといった、根拠のない理由による身分の差を異常（不自然）と感じるのは、人々にとって難しかったということ。」

3 「彼等の生は、誕生以来死の床に至るまで、そうした魔法の中で営まれたのである。」とあるが、「魔法」が解けなかったのはなぜか。

多様な例に埋もれて見えにくかったかもしれないが、一貫して問われているのは、身分といった無根拠な序列が、どのように信じられていたか、なぜ信じられていたのか、ということである。

だから、この問いも、1や2についての理由と重なっている。1は「実像が見えなかったから」、2は「身分を印象づける儀式と事物のせい」。

最後の問いなので、「なぜ」の答えの核心を探ろう。問1～4もヒントになる。

★対比に注目。⑦段落に注目。「理屈より心に、知性より諸感覚と感性に訴える諸象徴が、不断に機能し、体制維持の一助となっていた」。

理性（知性）／感覚（感性）

魔法が解けるのは、実態を認識し、理性（知性）を働かせたときだ。「みんな同じ人間だ」。福沢諭吉が喝破していたように。

魔法が維持されるのは、「身分を印象づける儀式や事物」によって本人の実態とは関係のないオーラが感じさせられるから。

こういった材料を使って、**☆なぜ→どのように、☆切り身**、で言い換えていこう。

「彼等（身分制社会を生きた人々）の生は、／誕生以来死の床に至るまで、／そうした魔法の中で営まれた」

という本文に戻って、「魔法」の部分をいいかえる。対比を生かして、「感覚が勝ち、理性が機能せず」という形で解きほぐす。

【解答例】「身分制社会を生きた人々は、生まれてから、身分を印象づける儀式や事物によって、身分差を自然なものとして受け入れる感覚を身につけ、それを不自然に感じ、実態を見抜く理性を働かせることは、（身分制社会自体が変化しない限り）ありえなかったから。」

●身分制社会＝身分を印象づける儀式・事物の演出が満ちている。

●生まれたときから、身分の感覚を習得している。

●理性を働かせることは困難だった。

これらのポイントを含むべし。